セルロイドサロン

第168回H26-5-20
野木村　政　三

お家さん

5月9日午後9時～11時30分（2時間30分）ドラマ「お家さん」が日本テレビ4チャンネルから放送されました。読売テレビが開局55年を記念して企画したスペシャルドラマ。プロデューサーは仲間俊彦。

ドラマの原作は、玉岡かおる（新潮社）の同名小説。

玉岡は1956(昭和31)年兵庫県三木市生まれ。神戸女学院大学卒。小説家、特に大阪を題材にした作品多数。2008年、「お家さん」で織田作之助賞を受賞。（お家さん・新潮文庫本5部、セルロイドハウス横浜館の樟脳コーナーに展示してあります）

ドラマ　お家さん　脚本：浅野妙子、監督：渡邊孝好。

キャスト

鈴木よね⇒天海祐希

姫路の商家生まれ。地元の同業の二男と離婚。長兄の世話で鈴木岩治郎と再婚し3人の男子産む。亡き岩治郎の社長職を継ぎ「お家さん」と慕われ、金子直吉の働きを得て傘下企業50社従業員20,000名の大企業の頂点に立つ。

金子直吉⇒小栗旬

おかみを「お家さん」と呼ばせた。樟脳販売を担当してから天才的な勝負感とチャレンジ精神を発揮。国家的感覚の商売で一時は三井三菱を凌ぐ鈴木商店グループを築く。

西田仲右衛門＝西村雅彦

よねの長兄、姫路市丹波屋の主人

鈴木岩治郎⇒生瀬勝久

よねの夫(再婚の相手)で、鈴木商店の初代店主。保守的でよねを冷酷に扱う。最初の頃の金子を無能者扱い。

イシ⇒泉ピン子

店の女中頭で、初めはよねと常に対立していたが叙々によねを認め、支えるようになる。

千⇒相武紗季

岩治郎の隠し子。素性を伏せて店の女中となった。直吉と恋仲になった。よねから手切れ金をもらって鈴木商店を去る。

玉喜⇒黒川知香

よねの初婚の相手の惣七が再婚後に産んだ子供。惣七と後妻も亡くなって孤児となり、よねの女中となる。田川を恋したが棚倉と結婚。

田川万作⇒大和田健介

直吉と同郷で、土佐の樟脳の山持ちの息子。直吉の命で台湾樟脳の開発を計る。台湾娘と結婚、子も生れるが母子とも死亡。

棚倉拓実⇒松重　豊

鈴木商店初の高等商業卒。土佐人。玉喜と結婚。

後藤新平⇒伊東四朗

台湾総督府の民政局長を経て台湾総督府長官。鈴木商店焼き打ち事件のときの内務大臣。

ドラマのストーリー

明治 10 年、最初の結婚に失敗したよねが、姫路を離れ神戸の鈴木商店々主・岩治郎(37 歳)に嫁ぐことになった。岩治郎とは、祝言の日に初めて会う。

よねの兄・仲衛門と岩治郎とは商いをする者同士で少なからず付き合いがあった。

明治 18 年(よねの三男誕生の翌年)、19 歳の柳田富士松が鈴木商店に入店。富士松は堅実に働き主人に重用される。

明治 19 年、富士松の橋渡しで 21 歳の田中直吉が入店。土佐が商売範囲だった富士松が、土佐の取引先に頼まれ土佐人の金子直吉を連れてきた。

直吉は、短気で口より先に手を出す岩治郎に叱られてばかり。入店 2 年後、直吉は土佐に帰ってしまう。

よねが、富士松を連れて土佐まで直吉を迎えに行く。

「さて、直どんに、これを見せとうてな。何かわかるかいなあ」

と、よねが白い紙包み二つを手にした。一つを開けると店で扱っている砂糖。そしてもう一つ。

白く結晶しながら、水をふくんで熔けそうな粒。
「これは―、土佐の特産の、樟脳でっか」
　つぶやく直吉に、よねは富士松と顔をみあわせ、うなずく。

「この白いもんは、どっちも、日本人には贅沢な品や。西洋では誰でもあたりまえに使うのだすて。日本がほんまに西洋なみの国になるなら、どこの家もこれらの白を贅沢と思わず使えるようにならんとあかん」

（直どんが、鈴木商店の樟脳の担当者になれ、ということ）この貧しい土佐の金子この家では、樟脳どころか、砂糖さえも貴重品だったので、よねの話には説得力がった。

「何しに帰ってきたのや」人を人とも思わぬ主人・直治郎の罵詈雑言も、直吉には気にならんようになった。
　砂糖は岩治郎と富士松に任せ、樟脳を始めた直吉は、めきめき売上を伸ばす。さすがに直治郎も彼を粗末に扱えなくなった。

　明治27年、鈴木商店主・直治郎が突然倒れ死亡、享年54歳。よね42歳。このとき鈴木商店は神戸の国際市場における砂糖と樟脳の卸商として、社員20名の輸出入業者になっていた。

「みなさまには、今まで通り、この鈴木商店をお助けいただきますようお願いします」
　と、よねが親戚・社員一同に挨拶をした。
　閉店のため最後の挨拶をすると思っていた親戚は驚いた。しかし心配顔の社員たちは飛びあがって喜んだ。
　鈴木よねは、おかみさん、から「お家さん」と呼ばれるようになる

　富士松の紹介で土佐の田川万作が入店し、直吉の下で樟脳担当となった。彼は樟脳のハタ売り（実物を持たずに取引をする虚業）で失敗し自殺しようとしたが「お家さん」にとめられる。がその損害が鈴木商店の経営危機をよぶ。

　直吉はハタ売り事件以来、樟脳を自社生産し常時手元に一定量の樟脳を確保しておかなければならないと考えるたようになった。

直吉と鈴木の技術者は、いったん粗製樟脳を採れば捨ててしまう樟脳油から、さらに再蒸留して粗製樟脳を取り出す「樟脳の再生法」を成功させた。「樟脳油さえあれば、なんぼでも樟脳が量産できる」ことになったのである。

それから鈴木商店の辰印樟脳は、品質もよく日本中の小売商に大量に出回っていくのである。

明治 29 年、日清戦争で勝った海軍艦隊が神戸港に現れた。湊川神社に参拝してから台湾に往くという。菊の紋章の旗艦「松島」の艦長・島村大尉は、直吉と同郷土佐での幼馴染みだった。

彼は、直吉が神戸で名だたる商店の大番頭までのしあがった、と知って直吉と会い台湾について問答をした。そこで直吉は台湾樟脳の可能性を見出した。

直吉の命をうけた田川万作が大工の棟梁に身をやつして台湾に潜入。半年ぶりに店に帰り台湾の状況を報告する。彼は直吉が最も知りたかった樟脳について予想以上の情報を携えていた。

（やはり台湾でも樟脳を採った後の樟脳油はそのまま捨てていたか）

明治 31 年、直吉は台湾の地をふんだ。目的は台湾総督府民政局長の後藤新平に会うこと。時は台湾総督第 4 代児玉源太郎中将の統治下。先の 3 代が果たせなかった切り札として送り込まれたこの知将は、女房役たる民政局長に後藤を指名した。

明治 33 年、台湾での樟脳専売法が成立。後藤民政局長は日本政府の許可なしで莫大な収入源を得ることになった。そして副産物・樟脳油の販売権利の 65% を鈴木商店が勝ち取った。

神戸に台湾総督府専売局の支局がおかれた。台湾で製造された樟脳はすべて神戸に集められ、世界各地に向う船に積み込まれた。

（欧州では、セルロイドの生産が盛んで原料の樟脳を日本に頼っていた）

テレビドラマのラストシーンは、暴徒と化した群衆が鈴木商店を目茶目茶に焼き討ちしている現場。屋根伝いに逃げる「お家さん」が痛々しい。田中直吉も急遽、出張先から帰った。直吉の強気の態度に拍手した。

＊＊＊

焼き討ち事件に世間の人は夫々の評価をした。が鈴木商店の経済活動はその後に最盛期を迎えたのである。（了）